

会話における名詞修飾構造の出現状況と形式的な特徴

泉 大輔

要旨

本稿では、日本語母語話者の日常会話で用いられる名詞修飾構造（動詞述語を持つ節が何らかの統語的な形式を介さずに名詞を直接修飾している構造）について、その出現状況および形式的な特徴を、日常会話コーパスを用いて定量的かつ実証的に明らかにすることを目的としている。調査の結果、①「内の関係」のほうが「外の関係」より使用数が多く、被修飾名詞になる名詞の種類は多岐にわたるといふこと、②「内の関係」では、1つの種類の被修飾名詞に対して、その出現数は多くの場合1~2件にとどまり、個別的・臨時的に使用される生産性の高い文法であるといふこと、③「内の関係」の被修飾名詞で頻繁に使用される名詞は、それ単独では自立的に用いられにくい非飽和名詞的な特徴を有しているといふこと、④「外の関係」では、繰り返し使用される名詞には「感じ」「気」「必要」「機会」「程度」などが見られるといふことが明らかになった。

【キーワード】名詞修飾構造 内の関係 外の関係 『日本語日常会話コーパス』 初級文法

1. 研究の背景および研究の目的

日本語教育においては多くの初級の教科書で、動詞述語を持つ節による名詞修飾構造が取り上げられている。東京日本語教育センター（以下、「当センター」という）で使用している初級教科書である『進学する人のための日本語初級』においても、「あそこで本を読んでいる人」「チンさんがいつも行くレストラン」などの例文が挙げられ、名詞修飾構造を指導項目の1つとして扱っている。しかし、日本語母語話者の実際の言語使用を観察すると、必ずしも教科書で取り上げられている名詞修飾の用法だけではない。特に日常会話では、初級学習者でも様々なタイプの名詞修飾の用法を実際に耳にする可能性があるだろう。会話において日本語母語話者が名詞修飾構造をどのように使用しているのかについて検討することは、初級における名詞修飾の指導に資するものと考えられる。そこで本稿では、日本語母語話者の日常会話で用いられる名詞修飾構造について、その出現状況および形式的な特徴を実証的に明らかにすることを目的とし、調査および考察を行う。

2. 研究の対象

研究の対象となる言語形式には以下の例(1)のようなものがある。なお、本稿における例文のうち、『日本語日常会話コーパス モニター公開版』から用例を採取したものには会話IDを付す。引用元を記載していない用例はすべて作例である。また、用例中の下線はすべて筆者によるものである。

- (1) 祖父が食事前に飲む薬、山田さんが転勤する噂、階段をのぼる足音

上の例(1)では動詞「飲む」、「転勤する」、「のぼる」(波線部)を述語とする節が、それぞれ名詞「葉」「噂」「足音」(下線部)を修飾している。本稿ではこのように動詞述語(ル形)を持つ節が何らかの統語的な形式(助詞「の」、引用形式「という」など)を介さずに名詞を直接修飾している形式を「名詞修飾構造」といい、研究の対象とする。なお、以下では名詞を修飾する節を「修飾節」、節によって修飾される名詞を「被修飾名詞」という。

名詞を修飾する成分には節のほかにも種々の形式がある。しかし、本稿では節が名詞を直接修飾する形式を研究の対象とするため、以下の例(2)～(5)のような名詞修飾は考察の対象としない。

- (2) その本、大きな問題
- (3) 私の犬、外国からの手紙、社長に対する不満、教師という仕事
- (4) 美しい花、便利な道具
- (5) 佐藤さんが結婚するという噂

例(2)は連体詞が名詞を修飾する場合、例(3)は助詞・複合助詞・「という」「といった」などを介して語が名詞を修飾する場合、例(4)は形容詞(イ形容詞)・形容動詞(ナ形容詞)が名詞を修飾する場合、例(5)は「という」「といった」「との」などを介して節が名詞を修飾する場合である。このような形式については考察の対象外とする。

3. 先行研究の検討と問題の所在

3-1 名詞修飾構造の2つのタイプ(「内の関係」と「外の関係」)

日本語記述文法研究会編(2008:51)では、名詞修飾構造を、①「被修飾名詞が修飾節の中の述語に対して主語や補語や状況語にあたるような格関係をもつもの」(例(6)(7))と、②「そのような格関係をもたないもの」(例(8)(9))の2つに分類している。前者はいわゆる「内の関係」、後者はいわゆる「外の関係」である(寺村1975)。

- (6) 最近広まっている噂
- (7) 地震が起こった1995年
- (8) 佐藤さんが結婚する噂
- (9) 地震が起こった翌年

例(6)(7)は被修飾名詞と修飾節内部の動詞述語との間に格関係が認められる。それぞれ「(その) 噂が(主語) 最近広まっている」(例(6))、「1995年に(状況語) 地震が起こった」(例(7))という事態を構成する関係(「内の関係」)を持つ。このように、被修飾名詞は事態を表す構成成分のうち主語や補語、状況語などになるもので、文法的に規定される。

一方、例(8)(9)には上記の格関係は見られない。このような名詞修飾節と被修飾名詞との関係(「外の関係」)は意味的に規定される。「外の関係」には、修飾節が被修飾名詞の内容を説明する「内容補充」と呼ばれるタイプ(例(8))と、被修飾名詞である相対名詞が指し示す時

点や場所について、それを決める基準となる時点や場所が修飾節によって表される「相対補充」と呼ばれるタイプ(例(9))の2つがある。「内容補充」タイプの例(8)では、「噂」の内容が「佐藤さんが結婚する」というものであると説明されている。「相対補充」タイプの例(9)では、「地震が起こった」という時点が基準となって「翌年」がいつであるのかが決まる。

3-2 日本語の名詞修飾構造の類型論的な特徴

英語などの欧米の諸言語における名詞修飾では、関係代名詞は関係節で表される事態の主語や補語にあたるものである。したがって、上述の「内の関係」に相当し、文法的に形成される構造である。一方の日本語の「外の関係」は、修飾節と被修飾名詞が意味的に結ばれた名詞修飾構造で、当該の構造は英語などの諸言語では関係節を用いて形成することはできない。Matsumoto (1997) から Matsumoto et. al (2017) までの一連の名詞修飾に関する研究によると、欧米の諸言語の多くは文法的に名詞修飾構造が形成され、意味的な関係によって名詞修飾構造を形成することはできない。しかし、アジアの諸言語には日本語と同様に「外の関係」にあたる名詞修飾構造が見られると述べられている。このように、日本語の名詞修飾構造の特徴的な点は、意味的な解釈の可否という制約を受ける「外の関係」の用法があることだと言える。

3-3 名詞修飾構造の第二言語習得に関する研究

日本語学習者の名詞修飾構造の使用に関する第二言語習得研究には、大関(2010、2018)がある。大関(2018)では学習者の母語に「外の関係」の名詞修飾構造があるのかどうかについて着目し、「外の関係」の名詞修飾構造の産出数を調査している。その結果、母語における「外の関係」の有無によって、日本語の「外の関係」の名詞修飾構造の使われやすさには偏りが見られ、関係節のある言語の母語話者にとっては「外の関係」は使いにくいと述べられている。

大関(2010)では韓国語・中国語・英語を母語とする学習者をレベル別(中級・上級・超級)に分け、産出された「外の関係」の名詞修飾構造について論じている。それによると、①「外の関係」は中級から使用が見られるが、使用している学習者数は多くなく、その使用数も少ない、②レベルにかかわらず使用数は個人差が大きいとのことである。

母語に「外の関係」があるかどうかによってその使われやすさは異なること、中級以降であっても「外の関係」を使用する学習者は少数であることから、「外の関係」の名詞修飾構造は学習者にとって使用が難しい文法項目の1つであることが窺える。

3-4 日本語の教科書における「外の関係」の扱い

当センターで使用されている初級教科書『進学する人のための日本語初級』では、全22課構成の中の第11課において名詞修飾構造が指導項目として取り上げられている。しかし、関連する副教材も含めて、例文や練習問題で扱われているのは「内の関係」(「チンさんがいつも行くレストラン」など)のみであり、「外の関係」の名詞修飾構造は扱われていない。これは当センターの教材に限ったことではなく、一般的に日本語教育の初級で指導される名詞修飾構造は「内の関係」のみである。当センターの教材では中級以降も「外の関係」の名詞修飾構造が指導項目として取り上げられることはない。筆者の指導経験を振り返ってみても、日本語教育では、中級以降にあえて「外の関係」を取り立てて指導するということはないように思われる。した

がって、「外の関係」の名詞修飾構造については、学習者の自然習得に任されているというのが現状であると言える。

3-5 問題の所在

ここまでの先行研究の検討を整理すると、次の3点になる。

- ①日本語の名詞修飾構造には意味的な解釈によって形成可能な「外の関係」がある。
- ②「外の関係」の名詞修飾構造を母語に持たない学習者にはその使用が難しく、中級以降でも「外の関係」の使用は少数にとどまっている。
- ③教育の現場では「外の関係」を取り立てて指導することはなく、現状では「外の関係」は学習者の自然習得に任されている。

これらをふまえると、学習者にとって使用の難しい「外の関係」の名詞修飾構造を集中的に指導すれば、学習者の「外の関係」の名詞修飾構造に対する理解や、その産出に何らかの効果があるかもしれない。しかし、「外の関係」の指導を取り立てて行う必要が本当にあるかについては議論の必要がある。現状、初級で「内の関係」のみが指導されているのは、「内の関係」が極めて生産性の高い名詞修飾構造であることが一因であると考えられる。「内の関係」の場合は被修飾名詞になれる名詞にほぼ制約がなく、種々の名詞を被修飾名詞として名詞修飾構造を形成することが可能である。

一方、「外の関係」の名詞修飾構造においては、被修飾名詞となれる名詞に制約があり、内容補充節や相対補充節を伴うことのできる名詞は限定される。「内容補充」タイプは「噂」などの言語表現を表す名詞、「推測」などの思考を表す名詞、「事件」などの事柄を表す名詞などがあり、「相対補充」タイプは「翌日」「横」のような時間や場所を表す相対名詞などがある。被修飾名詞の意味的な特徴にかかわらず形成できる「内の関係」とは異なり、特定の意味的な特徴を備えた名詞のみが形成できる点において、「外の関係」は使用の限定される名詞修飾の用法であると言える。

では、日本語母語話者は実際の言語使用において、「外の関係」の名詞修飾構造をそれほど使用してはいないのだろうか。仮にその使用が極めて少ないのであれば、周辺的な用法である「外の関係」を取り立てて指導する必要性はあまりないだろう。しかし、これまでの名詞修飾構造に関する研究は、その構造や機能に関する研究、被修飾名詞となり得る名詞の意味的な特徴に関する研究、修飾節内部に出現するモダリティ形式の制約に関する研究、修飾節と被修飾名詞の間の「という」「との」の介在可否に関する研究が中心で、そもそも日本語母語話者が「外の関係」の名詞修飾構造をどれほど使用しているのか、どのように使用しているのかという観点で調査を行った研究は管見の限り見られない。日本語母語話者の実際の言語使用をふまえて、「外の関係」に関する指導を検討する意義は十分にあると考えられる。

4. 研究課題

以上をふまえて、本稿では次の研究課題を設定する。

- ・初級の学習者でも接触する機会の多い日常会話において、①日本語母語話者は「内の関係」「外の関係」の名詞修飾構造をどれくらい使用しているのか、②頻繁に用いられている「内の関係」「外の関係」の被修飾名詞にはどのようなものがあるのか、その出現状況と形式的な特徴を、日常会話コーパスを用いて定量的に明らかにする。

なお、本稿は日本語母語話者の日常会話における名詞修飾構造の使用に関する初期的な研究であるため、その出現状況と形式的な特徴を記述するにとどまる。当該の名詞修飾構造が文中のどの成分（主語・補語など）として現れるのかという構文的な特徴、どのような場面・状況で用いられるのかといった文脈的な特徴、意味的な特徴および用法などについては次の段階で取り組むべき課題とする。

5. 研究方法

用例の収集には、国立国語研究所が開発した『日本語日常会話コーパス モニター公開版』（CEJC）を用いる。当該のコーパスは、家族、友人、知人、同僚などでなされる様々なタイプの日常会話約 50 時間分（モニター版）が収録された映像付きの大規模コーパスである。コーパス検索アプリケーションは『中納言』を使用し、用例の収集には次の検索条件を指定した。

前方共起 1：「[品詞] の [大分類] が [動詞]」AND 「[活用形] の [大分類] が [連体形]」
 キー：「[品詞] の [大分類] が [名詞]」

ただし、「こと」「もの」「わけ」「はず」「つもり」「やつ」などの形式名詞および「とき」「まえ（に）」「あと（で）」などの文法形式は初級の指導項目として教科書で扱われているため、調査の対象から除外する。

なお、本稿における調査では、まず動詞の非過去形（ル形）を述語とする修飾節を対象として用例を収集する。動詞の過去形（「～た」）および動詞の否定形（「～ない」「～なかった」）を修飾節の述語とする名詞修飾構造の出現状況と形式的な特徴については、順次調査を行っていくため本稿では取り上げない。

6. 調査結果

調査を行った結果、924 件の名詞修飾構造の用例を得ることができた。用例数が 10 件以上見られた被修飾名詞を以下の表 1 に示す。

表 1 『日本語日常会話コーパス』における名詞修飾構造の用例数

順位	名詞	用例数
1	人（内の関係）	217
2	感じ（外の関係）	51
3	気（外の関係）	34
4	必要（外の関係）	21
5	子（内の関係）	18

6	機会 (外の関係)	13
7	時間 (内の関係)	12
8	程度 (外の関係)	11
9	日 (内の関係)	10
⋮	⋮	⋮
合計		924

表1の結果を見ると、被修飾名詞として出現する名詞には偏りが見られる。出現数で言えば、「内の関係」のほうが「外の関係」より多い。用例数は多くないが、「外の関係」の名詞修飾構造は特定の被修飾名詞が繰り返し使用されている。

「内の関係」を形成する被修飾名詞で出現数の多いものには、「人」「子」「時間」「日」などが見られる。10件未満の被修飾名詞のほとんどは、1種類の名詞につき1~2件の用例数しか見られない。また、そのような1~2件の用例しか見られない被修飾名詞が200種類以上あり(例:「バス」「先生」など)、「内の関係」を形成できる名詞は多岐にわたる。

「外の関係」の名詞修飾構造の被修飾名詞として用例数が一定数見られたものには「感じ」「気」「必要」「機会」「程度」が挙げられる。また、用例数は10件未満であるが、「予定」「タイプ」「話」「場合」「形」「意味」「練習」「理由」「段階」「パターン」「立場」「雰囲気」などの名詞も見られる。

今回の調査では用例数が十分ではないため統計的な検定を行うことはできないが、日本語母語話者の日常会話における名詞修飾構造の使用には何らかの傾向が見られそうである。

7. 考察

7-1 「内の関係」の名詞修飾構造として用いられやすい名詞

前節で述べた通り、「内の関係」を形成する被修飾名詞には200以上の種類が見られ、これらの名詞のほとんどは用例数が1~2件しか採取されなかった。これは多くの種類の名詞が個別的・臨時的に「内の関係」の名詞修飾構造を形成しているということを表し、「内の関係」の名詞修飾構造は生産性が高いということを示している。「外の関係」と比較すると「内の関係」のほうが使用数が多く見られるのも、「内の関係」の被修飾名詞に意味的な制約がないからだということが実証的に言えるだろう。

「内の関係」の名詞修飾構造を形成する種々の名詞の中でも、日本語母語話者が日常会話で頻繁に使用するものには偏りが見られる。具体的には、「人」「子」といった人名詞や、「時間」「日」といった時を表す名詞などである。このような名詞は、「内の関係」を形成する名詞のうち、用例数の少ない被修飾名詞と比較すると異なる特徴が見られる。すなわち、「バス」「先生」のような用例数の少ない被修飾名詞は具体的な意味を持ち、それ単独で自立的に用いられる名詞が多く見られるのに対し、「人」「子」「時間」「日」といった名詞は自立的な用法もあるものの、何らかの修飾要素を伴わないと文の構成要素として成り立ちにくいという特徴がある。例えば、「あそこを走っているバス」を「バスがあそこを走っている」と言い換えることは自然であるが、「いつも遊んでばかりいる子」を「?子がいつも遊んでばかりいる」とは言い換えにくい。「バス」が自立的に用いられるのに対し、「子」は何らかの修飾要素がないと自立的に用い

られにくいのである。どちらも具体的な対象を表す名詞ではあるが、後者のタイプの名詞は何らかの修飾要素によって規定されないとそれ単独では外延が定まりにくいという性質を持ち、その点では「非飽和名詞」（西山 2003）に通ずる特徴であると言える。あるいは、形式名詞ほど語彙的な意味が希薄になっていないが、何らかの修飾要素による属性や様態の付与を必要とするような名詞であると言える。

7-2 「外の関係」の名詞修飾構造として用いられやすい名詞

「外の関係」の名詞修飾構造について見ると、その修飾節は被修飾名詞の「内容補充」である場合が多い。以下の例 (10) (11) は使用数が上位の名詞である「感じ」「気」の用例である。

(10) やっぱり外も杖か自転車かなんかを逆にこう支えにしてなんとか歩けば近所くらいは歩ける感じだよ。

(会話 ID : T004_006)

(11) なんかも一回だけ見たことある気がする。

(会話 ID : K001_008)

後続する共起表現について、「感じ」の場合は「だ」「がする」「がある」などが多く、「気」の場合は「がする」「がない」などがほとんどである。このような特定の表現が共起し、話者の感覚・心理感情・印象が述べられていることから、当該の名詞修飾構造は後続する要素を伴ってモダリティ表現的に用いられることが窺える。

日本語母語話者は「感じ」「気」を頻繁に使用しているが、日本語学習者の「感じ」「気」の使用が特に多く見られるのは上級以降である（大関 (2010)）。「～感じがする」「～気がする」などと婉曲的に述べられる 1 つの要因は、日本語母語話者の断定を避けようとする動機付けによるものと考えられる。しかし、日本語学習者がこのような婉曲的な表現を必ず使用できたほうが良いというよりは、理解できる程度で十分とも思われる。その一方で、当該の婉曲的な表現を使用することで、ある意味で日本人的な当たり障りのないコミュニケーションがとれるという点では、必要以上に断定した言い方で人間関係に問題を生じさせずに済むとも考えられる。以上をふまえると、「外の関係」という文法項目を集中的に取り上げるより、日本語母語話者が頻繁に使用する表現形式として個別に取り上げて指導するのがよいのではないだろうか。

使用数が多く見られた名詞（「感じ」「気」「必要」「機会」「程度」など）に関して言えば、その多くが初級または初中級レベルの語や漢字であり、語自体は多くの学習者が知っているものである。しかし、当センターの教科書および副教材では、これらの名詞が「外の関係」の名詞修飾構造を形成するような例文は挙げられていない。「必要」や「意味」といった名詞については、「～の必要がある」「～という意味がある」のような例文が挙げられ、本来の名詞としての用法（「必要」の場合は形容動詞としての用法も含む）しかが提示されていない。

「意味」という名詞については、当センターの教科書で取り上げられている例文においては「という」が前方に共起し、「その語が表す意味」というような意味で用いられている。しかし、実例を観察すると、「という」を介さずに「外の関係」の名詞修飾構造を形成する名詞「意味」の場合は、以下の例 (12) のように「それを行う意義・必要性」という意味でしか用いられな

くなる。

(12) 帰ってこれるんだったらその日中に帰って。前日泊まる意味がないから。

(会話 ID : K002_007)

さらに、当該の「意味」の使用では、後方に「がない」「がわからない」のような否定的な表現が共起し、発話者の非難や懐疑の心情が表されている。このように、「外の関係」を形成する名詞の中には、構文的な特徴によって多義の名詞が表す意味が1つに決まり、話者が特定の心情を表す場合に用いられやすいという傾向が見られるものがあることがわかる。このことから、やはり「外の関係」の用法を持つ個別の名詞には注意を払うべきであると考えられる。

8. 日本語教育における名詞修飾構造の指導

「内の関係」の名詞修飾構造については、種々の名詞を形成することが可能であり、多くの場合、1つの種類の名詞に対してその用例数が1~2件しか見られない。このように個別的・臨時的に用いられる「内の関係」の名詞修飾構造は生産性が高く、被修飾名詞の意味的な制約も受けないことから、初級で指導する文法項目として取り上げるのは妥当である。そのような「内の関係」を形成する被修飾名詞の中でも特に頻繁に用いられる名詞には傾向が見られ、形式名詞の用法と類似することから、学習者の理解はそれほど難しくないと予想される。

一方の「外の関係」の名詞修飾構造については、「内の関係」ほど使用数が多いわけではなく、被修飾名詞の意味的な制約を受けることから、生産性の高い文法ではない。ただし、繰り返し使用される被修飾名詞は一定数存在する。そのような被修飾名詞は、日本語母語話者の言語使用の特徴が反映されたモダリティ的な用法や、「外の関係」を形成する場合とそれ以外の構文環境に置かれた場合で表す意味が異なる事例が見られることから、やはり個別の名詞ごとに注意を払う必要があると言える。使用数や生産性を考慮すると、「内の関係」のように指導項目として取り上げて集中的に指導するよりは、個別の名詞ごとに語彙指導の中で取り上げるほうがよいのではないだろうか。例えば、中級以降の授業において「外の関係」に用いられやすい名詞が読解文の本文や新出文法の例文の中で扱われた際に、その用法と注意点を補足的に提示する程度で十分であると考えられる。

9. まとめと今後の課題

本稿は、日本語母語話者が日常会話で用いる名詞修飾構造の使用実態を実証的に示したものであり、頻繁に用いられる名詞修飾構造について、「内の関係」「外の関係」に分けてそれぞれの出現状況と形式的な特徴を明らかにした。本稿において明らかになったことは、①「内の関係」のほうが「外の関係」より使用数が多く、被修飾名詞になれる名詞の種類は多岐にわたるということ、②「内の関係」では、1つ種類の被修飾名詞に対して、その出現数は多くの場合1~2件にとどまり、個別的・臨時的に使用される生産性の高い文法であるということ、③「内の関係」の被修飾名詞で頻繁に使用される名詞はそれ単独では自立的に用いられにくく、非飽和名詞あるいは形式名詞的な特徴を有しているということ、④「外の関係」では、繰り返し使用される名詞には「感じ」「気」「必要」「機会」「程度」などが見られ、それらは初級・初

中級語彙として教科書で扱われているが、個別に注意を払うべき用法を持つ「外の関係」の形式は教科書では取り上げられていないということが明らかになった。また、その結果をふまえて、特に「外の関係」は語彙指導の一環として、個別の名詞ごとに「外の関係」に関する特殊な用法を補足的に提示するのがよいのではないかという示唆を行った。

本稿は、日本語母語話者の日常会話における名詞修飾構造の使用実態に関する初期的な研究である。そのため、今後の課題としては、さらに調査対象とする名詞修飾構造の形式を増やし、用例の収集を継続することで調査結果の妥当性を高め、日本語母語話者の名詞修飾構造の使用傾向やその特徴に関する記述を精緻化していく必要がある。

参考文献

- (1) 大関浩美 (2010) 「日本語学習者はどのような外の関係の名詞修飾節を使っているか」『言語文化と日本語教育』(39) お茶の水女子大学日本言語文化学会研究会 pp.50-59
- (2) 大関浩美 (2018) 「中級日本語学習者の名詞修飾節使用における母語の影響」『第29回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会予稿集』第二言語習得研究会 pp.88-93
- (3) 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」『日本語・日本文化』(4) 大阪外国語大学留学生別科 pp.71-119
- (4) 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房
- (5) 日本学生支援機構東京日本語教育センター (2006) 『進学する人のための日本語初級』独立行政法人日本学生支援機構
- (6) 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第11部 複文』くろしお出版
- (7) Matsumoto Yoshiko (1997) *Noun-modifying construction in Japanese: A frame-semantic approach*. Amsterdam : John Benjamins.
- (8) Matsumoto Yoshiko, Comrie Bernard and Sells Peter (2017) *Noun-modifying clause constructions in languages of Eurasia : rethinking theoretical and geographical boundaries*. Amsterdam : John Benjamins.

資料

「日本語日常会話コーパス モニター公開版 (CEJC)」国立国語研究所 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc (2019年5月21日閲覧)